

「HTPT collection 4」

「オーデイション」・・・・・・・・・・ 2 P

「女怪盗の集い」・・・・・・・・・・ 8 P

「やべえとこきちった選手権」・・ 16 P

「スカイシャーク」・・・・・・・・・・ 26 P

「光と闇」・・・・・・・・・・ 36 P

「オーデイション」

【登場人物】

演出

助演出

役者 1

役者 2

熊 1

熊 2

舞台はオーディション会場。下手側に演出、上手端に助演出がいる。上手側に『劇団クロサワ オーディション会場』と書かれためくりがある。

助演出「はい、ありがとうございましたー」

明転。

助演出「(上手裏に) ではオーディションの結果は1週間以内にご連絡しますので」

助演出、下手側に向き扉を開けるマイム。中に入る。

助演出「いやーここまであんまりピンとくる人いませんねー演出」

演出「そうだな。やはりヒロイン役募集というのは、ハードルが高かったかもしれないな」

助演出「次が最後の組か…:では次の方達どうぞー!」

上手から役者1と役者2が入ってくる。

役者2「よろしくお願いしますっ!」 役者1「(頭を下げる)」

助演出「(履歴書を見ながら) えー菅原さんと國部さんですね」

役者2「はいっ!」 役者1「(頷く)」

助演出「私は助演出の古澤です」

役者2「はいっ!」

助演出「お二人にはこれから早速演技を見せてもらいます」

役者2「はいっ!」

助演出「我々の次回公演の主人公は殺し屋なのですが」

役者2「はいっ!」

助演出「ヒロインは一般の女性となります」

役者2「はいっ!」

助演出「今回はそのヒロインがチンピラ達に襲われてしまうというシチュエーションで」

役者2「はいっ!」

助演出「お1人で、即興劇をやってもらいます」

役者2「即興劇…!?!:良いでしょう」

助演出「…はい。ただですねこの演技、2人同時にやってもらいますので、隣の方の演技につられないように頑張ってください」

役者2「(役者1に) ごめんなさいね。私の世界観があなたを飲み込んでしまったら」

助演出「はい…:ね。では演出」

演出「(頷く)では即興劇…初め!」

役者2は大げさな演技を始める。役者1はその場から動かず小刻みに震えるだけ。

役者2「な、何!? 一体何なんですかあなた達!? きや! ヒールが…! あのの人に会うために無理して履いたヒールが仇となるなんて…! や、やめて! 乱暴しないで! それは…! あの人ももらった大切なネックレスなの! やめて踏まないで! やめて! …!! …!! …!! ぜつ☆ぼう」

助演出「主張がうるせえなあいつ! ずっとうるせえよ。…もう片方の人は全然喋らないし動きもないし…この組も駄目ですかね? 演出」

演出「いや…違う」

助演出「え?」

役者2 (音声)『悪いけど、ここは私の独壇場となりそうね! …え? (役者1を見てピタリと止まる)』

演出「國部さんのあはれは…リアルを追及した演技だ…!」

役者2「こ、この女! 確かにリアルなら恐いチンプラ達に囲まれた場合言葉なんて出ない…! ただその場でじつと小刻みに震えるだけ…! それを演じきっているというの!?」

助演出「すごい解説してくれるなあの人」

演出「なんてリアリティ…! 演技力…! まさかこんな逸材がいたとは…!」

助演出「はあ」

演出「待て…視える! 視えるぞ…! (急にテンションが上がる)」

助演出「(ビクツとする) なんすか?」

役者2「(目を…)ししして辺りを見回す) ば、馬鹿な…!」

助演出「え? 何?」

演出「キミには視えないのか? (辺りを見回しながら) 彼女のあまりの演技力によって創り出されたイメージ、彼女の周りを取り囲む…」

演出・役者2「チンプラを!」

助演出「いや全然視えないですけどね私には。…でもその、演技力高すぎて周りにもそのイメージを見せてるって、じゃああの子、今週刊少年ジャンプで絶賛連載中の役者漫画アクタージュに出てくる主人公の夜風景ちゃんみたいってことですか!?」

演出、役者2、首をかしげる。

助演出「なんでピンとこないんだよ」

役者2「…私、マガジン派なんで」

助演出「それは別にどうでも良いですけど。じゃあとにかく取り囲むチンピラが視えてるんですね？お二人には」

演出・役者2「めっちゃ視えてる」

助演出「そうですか…」

役者2「それにしてもなんて人数のチンピラなの…！全部で10人、」

演出「いや…（上手側に歩き扉を開け、外を見る。その後また扉を閉め、戻りながら）20人はいる」

助演出「外にも！？外にもそのイメージのチンピラいるんだ？」

覚悟を決めた表情になる役者1、チンピラ達に構える。

演出「どうやら彼女は…戦うことを選択したようだ」

助演出「大丈夫なの？20人相手なんですよね？」

役者2「…仕方ないわね。女の子1人にこの人数じゃあね…（役者1の隣へ移動し構える）私もあなたに手を貸す、」

演出「（役者2を止めながら）あ、入ってくるのはやめてくれる？」

役者2「あ、すみません」

助演出「演出そこは厳しいですね」

役者2、とぼとぼと助演出の隣に移動し、止まる。

役者2「（役者1に向かって）負けんじやないわよファイト！」

助演出「めげないね、あんたも。…でもこの状況、どうやって切り抜けるんだ？」

役者1、何かを勢いよく取り出す動作。

助演出「え？何か取り出した？何？スマホ？え？拳銃とか？」

役者2「ふうー…分からないの？あれは、」

演出「角笛だ」

助演出「角笛！？なんで？吹くの？」

役者1、角笛を天に向かって吹くマイム。

助演出「吹いてるし…」

演出・役者2「ぐううう…！（耳を抑えながら苦悶の表情）」

助演出「音も聞こえてんだ！？角笛の」

役者2 「…助けを呼んだの？」

演出 「そのようだな。今の音色、あの女…とんでもない獣を呼び寄せやがった…！」

助演出 「獣？」

役者2 「一体、どんな獣を…!?!？」

演出 「…熊だ」

助演出 「は？」

演出 「ここに熊が現れるぞ…」

助演出 「何言ってるんですか？演出…流石にもうついていけませんよ。熊って…おふざけはもうこの辺にして、」

舞台中央から熊の手がチラチラ出てくる。

助演出 「え？ちよつと待って…なんか私にも視えてきたんだけど！え！？マジで！？本当
に視えるもんなんだ！？え？熊くるの！？あ、あ、あ、」

助演出の台詞に合わせて熊の手から全身が出てくるが、出てきたのは熊のお面と
お腹に『熊』と書かれた紙が貼ってあるだけの人（熊1）。

助演出 「あ…ああく………」

演出 「…熊だ」

助演出 「熊ではないねえ！これは…熊とは呼べないよ！流石に」

役者2 「あ…ああ…！向こうからもう1体熊が…！」

演出 「何！？そうか…チンピラ側にもいやがったのか…！」

演出・役者2 「獣使いが！」

助演出 「なに獣使いって？当たり前のように使わないでください」

今度は上手から、お腹に『べあく』と書かれた紙が貼ってあるだけの熊2が現れる。

助演出 「そしてもつと雑なの出てきた！べあくじゃねえよ！」

熊1 「があああ！！！」

熊2 「くまあああ！！！」

助演出 「何その鳴き声？」

徐々に近づいていく熊1と熊2。熊1、熊2に攻撃しようとするがその手が止まる。

熊1 「（熊2を見ながら）……父ちゃん？」

助演出「は？」

熊1「熊のお面を外す」あんた…10年前になくなった父ちゃんだよな！？こんなところで何やってんだよ父ちゃん！なんで熊役の仕事なんてやってんだよ！」

助演出「どういうこと？」

熊2「太郎…急にいなくなってますまなかった…しかし俺がいたって、病気の母さんの体はよくならない…」

助演出「え？いやホントどういうこと？イメージの熊をやってる人達が実は親子つてもうこれどういう状況！？」

演出「あれはな…俺も全然分かんない！怖い怖いということ！？」

助演出「ですよ！よかった演出もこっち側だ」

熊2「お前達のために、今はこんなよく分からない熊の仕事もやって金を稼いでいるんだ」
熊1「俺だって母ちゃんのためにこんな仕事してるんだよ…！でもお金は一向に貯まら

ない…！このままじゃ母ちゃんの体は…！」

熊1・熊2「畜生…！」

役者1「お二人とも…お辛かったですよね」

助演出「喋ったとうとう！え？何？もしかしてあの2人は國部さんの仕込みなの？」

役者1「財布からお金を取り出し渡す」これ、少ないですけど。お母様の医療費に当ててください」

熊1・熊2「ありがとうございます！」

役者2「(泣きながら)私も(財布からお金を取り出し渡す)」

助演出「あんたはなんでだよ。情に脆すぎるだろ」

熊1と熊2、感謝しながら上手からはけていく。

演出「ふ…久々に良いもん、見せてもらったな」

助演出「…そうですか？あなた途中パニックってましたけどね」

演出「何はともあれ決まりだな、今回のオーディション。お前ら2人とも合格だあ！」

役者1「ありがとうございます」

役者2「ふん…足引つ張ったら、承知しないわよ」

助演出「大丈夫かな…」

演出「それじゃ詳しい契約内容はあとで話すが、今の時点で何か質問はないかな？」
役者1「あ、では1つだけ。さっきの親子の人達って誰だったんですか？」

助演出「お前も知らないのかよ！」

暗転。

(終)

「女怪盗の集い」

【登場人物】

モエ子

ヨコタ姉

ヨコタ妹

スパイ

ヤンス

玉黒姐さん（男）

舞台はアジト。モエ子、ヨコタ姉、ヨコタ妹、スパイ、ヤンスの5人がいる。明転。

モエ子「今日は集まってくれてありがとう、皆」

ヨコタ妹（以下妹）「まさか実力派の女怪盗をこんなに集めるなんてね」

ヨコタ姉（以下姉）「流石は、『予告した獲物の入手率は100%、華麗なる女怪盗モエ子！』ね」

『ダダン！』という音と一緒に正面を向くモエ子。

モエ子「しかし今回の獲物は国宝ブラックエンジェル。流石に私1人では手に余る代物。だからあなた達には期待しているわ、『阿吽の呼吸で数多の目を欺いてきた変装の達人、ヨコタ姉妹！』」

『ダダン！』という音と一緒に正面を向くヨコタ姉、ヨコタ妹。

姉・妹「私達は…一心同体！」

姉「昨日も馬鹿な劇団の役者達から小金を頂いてきたわ」

妹「ええ。姉様と私で熊役の親子に変装して騙し取ったわ」

モエ子「どういふ状況なのそれ？その場のイメージが全くできないんだけど」

姉「私達も途中からよく分からなくなっただわ」

妹「最後はほぼノリでなんとかしたわ」

ヤンス「いやーしかし、ヨコタ姉妹とモエ子さんの会話が聞けるとは、感無量でヤンス」

姉「あなたは…」

ヤンス「今日は皆さんのような有名怪盗の方々と一緒に仕事できて、光栄でヤンス」

姉「ヘタにへりくだるのはやめな。今やお前だって実力者の1人」

モエ子「その通り。『先輩怪盗のあらゆる技術を盗み取り自分のものとする、若手ナンバーワン怪盗、ハルカ！』」

『ヤンス！』という音と一緒に正面を向くヤンス。

ヤンス「いやいやいやそんなそんなヤンスヤンス」

モエ子「ヤンスヤンスって何？」

スパイ「ふん…さつきから盗人同士ベタベタと目障りね」

姉・妹「何？」

スパイ「私は必要以上にあんた達と馴れあう気はないわよ」

ヤンス「あなたは：『潜入捜査・裏工作のスペシャリスト、セクシースパイ、トモミ！』

『セクシー！』という音と一緒に正面を向くスパイ。

スパイ「ハニートラップが得意よ」

モエ子「ちよつとセクシートモミ。今日私達はチームでしょ？輪を乱すような発言はやめてもらえる？」

スパイ「私は高尚なスパイなの。怪盗とか、小汚いコン泥と一緒にしてもらいたくないだけ」

モエ子「…何ですって？」

スパイ「…何よ？」

バチバチするモエ子とスパイ。

玉黒「喧嘩はおやめなさい」

姉・妹「こ、この声は！？」

ヤンス「まさか…！」

舞台中央から派手に玉黒が出てくる。

スパイ「全くあなた…とんでもない人物も呼んでしまったのね…！」

モエ子「そうよ。『このお方にできない盗みはない…これまであらゆる奇跡を生み出してきた伝説の怪盗！玉黒姐さん！』」

『ダダン！』という音と一緒に正面を向く玉黒。更に『セクシー！』という音と一緒にセクシーポーズをとる玉黒。更に『ヤンス！』という音が鳴る。

玉黒「これはちよつと意味分かんないわ」

モエ子「ヤンスこら！」

ヤンス「なんかすいやせん！」

玉黒「まあまあ、良いわよ。それより今日私達は同じチーム、対等な仲間よ。そうやって気を遣うのは、やめない？」

姉「流石は玉黒姐さん…！なんて寛大なお心の持ち主…！」

妹「姉様が唯一お認めになる姐様…！それが玉黒姐様…！」

スパイ「はあ…さっきまでの小競り合いが恥ずかしくなるわ…」

モエ子「とにかく姐さんが参加くださったら今回の仕事は成功したも同然です」

玉黒「大船に乗った気でいなさい。それじゃあ皆で、仕事の内容を確認しましょうか」

5人「はい」

玉黒「予告状は？」

モエ子「勿論すでに警察署に送っています」

玉黒「分かっているとは思うけど、予告状に書いてあることは絶対。必ず守るのが怪盗としてのマナーであり、ポリシーよ」

5人「はい」

玉黒「確認するまでもなかったわね。それじゃあ一応、予告状の内容も確認しましょうか」

モエ子「分かりました。（予告状を取り出して読む） 予告状。3月1日、本日の21時」

5人、頷く

モエ子「三角美術館に眠る」

5人、頷く

モエ子「国宝ブラックエンジェルを」

5人、頷く

モエ子「我々女怪盗5人が、頂く」

5人「…うん？」

玉黒「ごめんなさい：最後のところ、もう一度読んでもらっても良い？」

モエ子「…我々女怪盗5人が、頂く」

玉黒「6人いない？」

スパイ「いやちよつと待って…：6人いるわね」

6人「いるわねえ…」

玉黒「え？なんで？なんでそんなことになっちゃったの？これじゃあ全員で行けないじゃない」

スパイ「ちよつとあんたでしょ？これ書いて出したの」

モエ子「待って。これには理由があるの」

スパイ「何？大したことなかったら承知しないわよ」

モエ子「いやね私も今気づいたんだけど…ヨコタ姉妹っていつも2人で仕事してるじゃない？だから2人で1組、1人って、教えてたわ」

間

スパイ「それはしようがないわね」
姉・妹「セクシートモミ？」

スパイ「さつきも一心同体とか言ってたしね、確かに2人で1人のイメージあるわ」

玉黒、スパイとモエ子の肩に手を置く。ビクツとする2人だがその後3人、頷く。

妹「いや何の頷き！？玉黒姐さんまで！」

姉「いやあなた達ちよつと待ちなさいよ！」

ヤンス「まあまあ皆さん、少し落ち着いてください」

姉「ヤンス…」

ヤンス「確かにヨコタ姉妹はいつも2人で活動してますし、裏では若手達に1人じゃ何もできないうざこ怪盗と舐められています」

姉「そうなの？」

妹「聞きたくなかったわ」

ヤンス「でも、今回みたいにチームで仕事をする時は、きっちり2人分の報酬を要求する燃費の悪い、クソ怪盗でヤンス」

間

ヤンス「ただ！」

ヨコタ姉・妹、安心する。

ヤンス「お二人の変装技術は！あたいがすでに習得したのでホントもうただの役立たずで

ヤンス

妹「(食い気味で) 止まらねえなお前！」

姉「待てども待てどもフォローが出てこねえな！」

モエ子「あんた中々辛辣ね、ヤンス」

スパイ「じゃあなんかもう、1人をメインキャラにして、もう1人はサブキャラでアイテム使ったらサブが技放つとかにできないの？」

姉「ゲームキャラかなんかの」

妹「できる訳ないでしょ。ていうかそれだったらセクシートモミ！あんたが抜けなさいよ！」

スパイ「は？なんでよ？」

妹「さつきあんた自分で、怪盗みたいな小汚いコソ泥と一緒にしないでって言ったじゃない」

姉「確かに。予告状には5人の女怪盗って書いてあるんだし、あんた怪盗じゃないんだ
ったら抜けなさいよ」

スパイ「怪盗でえくす（ムカつく感じで）」

姉「は？」

スパイ「私も怪盗でえくす。よくよく考えたらスパイも怪盗も同じようなもんでえくす。さ
っきはなんかかましてやるうと思っただけだから言っただけでえくす。はい、先ほどの発

言は訂正させて頂きましたので私が抜ける理由はもうありませえくすん」

姉「なんだこいつ」

玉黒「もうセクシーのかけらもないわね」

妹「ヤンスからもなんか言ってやりなさいよ」

ヤンス「良い開き直りっぷりでヤンス」

モエ子「褒めてんじゃないよ」

スパイ「じゃあもうこの際だから言わせてもらおうけど」

モエ子「何よ？」

スパイ「いやホント今更こんなこと言うのもあれなんだけど…この中に女怪盗、っていうか、

女…なの？みたいな人が、いるわよね…？1人」

モエ子「うん…まあ…それ、言っちゃう？今更…」

玉黒以外の5人「うん…うん…うん…」

玉黒以外の5人、ゆっくり玉黒に顔を向ける。

間

玉黒「…あんたね（モエ子に）」

モエ子「いやあんたよ」

玉黒、衝撃的な顔をする。

モエ子「あなたのことですよ」

玉黒「あたし！？ちよっと待ってよ！あたしのどこが女じゃないって言うのよ！」

スパイ「全部よ。あなたただのオカマじゃないですか」

玉黒「はあ？心は誰よりも乙女よ！この中の誰よりも乙女よ！それじゃあ誰が一番乙女
なのか決めるために皆で今日食べたお昼ご飯を言い合いましょ！せーの、生姜
焼き定食！誰か言いなさいよ！」

モエ子「1人で何言ってるのよ！？そして生姜焼き定食は乙女じゃないわよ！」

玉黒、衝撃的な顔をする。

ヤンス 「まあまあ皆さん！少し落ち着いてください！」

玉黒 「ちよつと…ヤンスが出てくるこのパターン嫌よ私」

ヤンス 「確かに玉黒姐さんは、ブスでヤンス。…終わり」

玉黒 「終わりがいい！今度はシンプルね？」

モエ子 「じゃあもう分かりましたよ姐さん。今回は予告状を間違えた責任をとって、私が抜
けますよ（手を挙げる）」

スパイ 「ちよつと、あなたばかりカッコ付けさせられないわ。私が抜ける（手を挙げる）」

ヤンス 「じゃあ後輩のあたいが抜けます（手を挙げる）」

姉・妹 「いやいや私が（手を挙げる）」

5人、玉黒に顔を向ける。困惑する玉黒。

5人 「…どうぞどうぞ」

玉黒 「まだ手を挙げてねえわ！早まるんじゃないよ！」

モエ子 「今回は後輩に譲ってくださいよ！玉黒姐さん！」

スパイ 「さっきの寛大さを見せてくださいよ！玉黒姐さん！」

姉 「玉黒姐さん！」

妹 「頭もじゃもじゃ！」

モエ子 「たわし！」

玉黒 「うるせえ！もうただの悪口じゃないの！もじゃもじゃうつしてやる！」

玉黒、4人にもじゃもじゃをうつそうとする。ごちゃごちゃする場。

ヤンス 「もうやめてください！」

5人 「え？」

ヤンス 「もう…いやでヤンスこんな小競り合い！せっかく…憧れの先輩方と一緒に仕事ができるんだって、ワクワクしていたのに…！」

モエ子 「ヤンス…」

玉黒 「あなたが一番私らに辛辣だったけどね…」

ヤンス 「6人で盗みに行ったって良いじゃないでヤンスか！予告状が、怪盗のマナーが、ポリシーが、そんなに大事でヤンスか！？この集まった6人の絆の方が、よっぽど大事でヤンス！あたいは…あたいは…！」
→途中から感動的なBGMが流れる。

ヤンス、スマホを取り出しボタンを押す。BGM 止まる。

モエ子「着メロかい」

ヤンス「(電話に出る) はいもしもし」

モエ子「出るんかい」

ヤンス「はい、はい、それでヤンス。…ええ!?あの伝説の怪盗ルペンさんとフジッコさん

があたいをチームに!?へい、へい、いや勿論でヤンス!いやいやお二人に比べま

したら玉黒なんてカスみたいなもんでヤンスから。へい、へい、では1時間後に。

へーい。(電話を切る) ……すみません祖父が危篤でして」

モエ子「いや嘘下手か!」

ヤンス「ということですよ!あたいこのチーム抜けるでヤンス〜!」

ヤンス、はける。残った5人、顔を見合わせる。

玉黒「…飲み行く?」

4人「行くー」

暗転。

(終)

「やべえとこきちった選手権」

【登場人物】

実況

解説

審査員 1 ～ 3

①男

女

案内人

教祖

信者 1 ～ 2

②女 1 ～ 2

男

借金取り 1 ～ 2

未来人

③男

④姫

侍

敵侍

⑤人 1 ～ 5

① 幸せ団

舞台は屋敷。舞台上手側に男と女、案内人がいる。大雨が降っているSE。
明転。

男 「すみません急に。雨宿りさせてもらって」

女 「ありがとうございます」

案内人 「いえいえ。困った時はお互い様でございます。それでですね、こちらの奥に家主が
おりますのでご挨拶して頂いてもよろしいでしょうか？」

男 「はい、それは勿論」

案内人 「ではこちらに」

案内人を先頭にして男と女、下手側に向かって足踏みする。

男 「(女に) 大きい屋敷だな」

女 「そうね」

下手から教祖と信者1、信者2が出てくる。

男 「ああ、あちらの方が」

案内人 「そうです。教祖様でございます」

男 「教祖？」

案内人 「(教祖に) 教祖様、幸せ」

教祖 「幸せ」

男 「なんか…そういう、団体さん…？」

案内人 「こちらの方が雨宿りをしたいと」

教祖 「分かりました。人に親切にする。これが皆の幸せに繋がります。幸せ」

信者1 「幸せ」

信者2 「幸せ」

案内人 「幸せ」

女 「幸せ」

男 「お前も!？」

教祖 「今日はハピ神様が降臨なさる素晴らしい日です。さあ皆さんで、幸せを体現しまし
よう」

案内人 「(急にハイテンションで踊り出す) ハッピーハッピーハッピーダンス!」

信者1・2・案内人 「ハッピーハッピーハッピーダンス! (ハイテンションで踊る)」

教祖・信者1・2・案内人・女 「ハッピーハッピーハッピーダンス! (ハイテンションで踊る)」

男「やべえとこきちったああー!!!」

実況「さあ始まりました！第56回やべえとこきちった選手権！」

→台詞と同時に中央の幕が開くと、下手側に実況と解説、上手側に審査員が3人いる。

実況「のっけからやべえとこに入ってしまったあの男性ですが。実況は私斉藤と、解説はお馴染み、日本やべえとこきちった協会副会長の荒原さんにお越し頂いております。本日はよろしくお願い致します」

解説「よろしくお願いします」

実況「えーこの選手権はですね、如何にヤバい所に来てしまったのか、入ってしまったのかを、場所・シチュエーション等を考慮し総合的に判定し、審査員の方々に点数を付けてもらうというものでございます。因みにこの、今のシチュエーションは如何だったでしょうか？荒原さん」

解説「中々やべえですね。勿論場所・状況共にやべえんですけど、やはり友達だと思っていた女性もすであの団体の一員だったというのが一番やべえですね。おそらく計画的にこの屋敷へ誘いこんだんでしょう」

実況「確かにそう考えるとやべえですね。…では！審査員の皆さん、点数をお願いします！」

審査員1『8点』、審査員2『6点』、審査員3『10点』の札を挙げる。

実況「おおっと！これは初回から中々の高得点です！」

解説「この点数が今後の基準点になりますからね」

実況「因みにもう今のシチュエーションは終わりですので、この後彼（男1）がどうなるのかは分かりません。あくまでこの選手権は、『やべえとこきちった』、『やべえとこ入っちゃった』と誰かが言った時点で終了となります」

①のシチュエーションの人達、全員はける。その後②のメンバーが出てくる。

解説「えー彼の今後、幸せを」

実況「上手い！ということですね、それでは次のシチュエーションについてみましょう！」

②修羅場

舞台は男の部屋。男、女1がいる。実況と解説もいる。

女1「ねえサトシ君。私達って恋人よね？」

男「当たり前だろ。何言ってるんだよ」

実況「どうやらあの2人、カップルのようです」

男「俺の借金の肩代わりもしてくれてんだしさ」

女1「そうだよね（笑顔で）」

実況「さらっとクズ発言が出ました」

女1「（上手側に行きながら）じゃあサトシ君…」

女1、上手側の幕を開けると女2がいる。

女1「この女は誰なの!？」

男「え？」

実況「突然の修羅場！借金して浮気もしていたのかこの男！やはりクズだ！」

解説「しかし世の中にはダメメンが好きな女性も意外といますからね」

女1「あなたのこと信じてたのに…！（包丁を出しながら）あなたを殺して私も死ぬわ！」

解説「病んでますねえ」

男「ちよ、ちよっと」

女1「あの世では浮気しないでね、サトシ君」

男「誰のこと言ってるの？ここにはキミ以外誰もいないじゃないか」

女1「は？」

女2「くつくつく…！あなたには私が見えるようね！」

女1「何!？」

女2「私はこの部屋にとり憑く悪霊！バレてしまっただけは仕方ない！お前もこの男も呪ってくれるわ！」

実況「まさかの悪霊でした！一体どうなるんだ！」

借金取り1「おらああ!!！」

上手から借金取り1・2が現れる。

借金1「サトシでめえええ!!!」

借金2「はよ金返せやああ!!!」

『ダダダダダダ、ダダダダダダ』というターミネーター風の音。『プシュ』という音と共に真ん中から未来人が現れる。

未来人「ここが…100年前の世界か」

未来人、混沌とする部屋をきよきよと見渡す。

未来人「…やべえとこきちった？」

実況「終了ー！！」

→台詞と同時に中央の幕を開き、上手側の審査員3人を出す。

実況「いやーまさかの未来からやって来た人が言うとは！」

解説「これは裏切られましたね」

実況「しかもあらゆる角度からやべえ状況でした！サトシさんはこの後どうなってしまうのか！」

解説「ただこのサトシ君、この状況でもまだへらへらしてますけどね。ある意味一番やべえです」

②のシチュエーションの人達、全員はける。その後③のメンバーが出てくる。

実況「それでは、審査員の皆さん点数をお願いします！」

審査員1『9点』、審査員2『9点』、審査員3『10点』の札を挙げる。

実況「これは高得点だー！素晴らしい！」

解説「いやー今回、かなりハイレベルな戦いですね。次も期待しちゃいますよ」

実況「そうですね。では会場の興奮も冷めやらぬうちに、次の、シチュエーションです！」

③ 飲み物

舞台は部屋。男がペットボトルを持っている。実況と解説もいる。

男、ペットボトルでそのまま水を飲むが勢いが強すぎてむせてしまう。

男「ごほごほ…やべえとこ入っちゃった」

実況「終了ー！！」

→台詞と同時に中央の幕を開き、上手側の審査員3人を出す。

解説「早い」

実況「はい、今度はめちゃくちやあっさりしていました！」

解説「まあ裏切りつちやあ裏切りではありませんけど…」

実況「審査員もかなり悩んでいる様子です」

解説「さっきとの落差があまりにもありますからね」

実況「では、点数の方は？」

審査員1『3点』、審査員2『2点』、審査員3『10点』の札を挙げる。

実況「10点！？え？10点？」

解説「あーこの審査員の方は、10点の中村さんです」

実況「10点の中村さん？」

解説「基本的に10点しか出さないんですよ」

実況「確かにずっと10点でしたねこの人」

解説「一応悩みはするんですけどね。結局10点になっちゃう。優しい人なんですよ」

実況「審査員としては無能ですけどね」

③のシチュエーションの人、はける。その後④のメンバーが出てくる。

解説「しかし今のシチュエーション、良い箸休めにはなりましたよ」

実況「そうですね。えーそれでは、次のシチュエーションにいきましょう！」

④退けぬ闘い

舞台は山道。姫と怪我をしている侍がいる。実況と解説もいる。

姫「…迅火、身体は大丈夫ですか？」

侍「姫様、拙者に気遣いは無用。急いでここを抜けましょうぞ」

実況「これはまた、さっきまでとは全然雰囲気違いますね」

解説「はい」

敵侍「どこへ行く迅火」

敵侍が下手から出てくる。

侍「赤影殿…!!」

敵侍「迅火、その女をこちらに渡せ」

侍「…姫様、ここからはお1人でお逃げください」

姫「いけません迅火！あなたの身体は先の戦いで…!!」

侍「…!!（力強く姫を見る）」

姫「…分かりました。しかし必ず勝って…ふもとの町で、落ち合いましたよ…!!」

侍「ええ…必ず」

姫「約束…しましたからね…!!」

姫、上手へはける。

実況「え何これ？ホント…雰囲気全然違うんですけど…」

解説「これ…違う選手権やってないですよね？」

敵侍「無駄だ、迅火よ。万全の状態ならまだしも、今の手負いの身体では俺には絶対に勝て、」

侍「(食い気味) 勝つさ…!!…必ず!!拙者はお主を越えてゆく!!」

侍と敵侍、同時に抜刀し、互いに刀で受ける。

敵侍「越える?…まだ早い!」

一太刀、刀を交える。

侍「遅いくらいだ!」

二太刀、刀を交える。

敵侍「あの女のために俺が斬れるか!？」

一太刀、刀を交える。

侍「あの女のために斬ってみせるさ!!」

更に数太刀、刀を交える。解説はもう見入っている。

実況「ちょっと運営さん?これ大丈夫ですか?」

侍と敵侍、少し距離を取る。

敵侍「ならばお前の覚悟、見せてみる!! (構える)」

侍「言われずとも!! (構える)」

侍「赤えええい!!!」 敵侍「迅火あああ!!!」

侍と敵侍、最後の一撃を打ち合う。ぐらつく侍。

敵侍 「…お前のために、強く、強くあろうと…努めてきたよ」

侍 「今まで…ありがとうございます」

敵侍 「ふっ…」

倒れる敵侍。刀を鞘に納める侍。

侍 「はあはあはあ…すみません、姫様…約束は、守れそうにない…」

侍、膝をつき、胸に手を当てる。

侍 「最後の一撃…やべえとこ、入っちゃった…! (倒れる)」

解説 「迅火ー!」 実況 「終了ー!」

→台詞と同時に中央の幕を開き、上手側の審査員3人を出す。審査員達、泣いている。

解説 「(泣きながら) 何これ!? 何これ!?!」

実況 「荒原さんも審査員の皆さんも泣いております! いやーこういうパターンもあるんですねえ」

解説 「続きが気になるー!」

実況 「それでは審査員の皆さん、点数をお願いします!」

審査員1 『100点』、審査員2 『100点』の札を挙げる。審査員3は迷っている。

実況 「10点満点を越えてきたー! 中村さんは？」

審査員3 『ありがとうございます』と書かれた札を挙げる。

実況 「もはや点数ですらない!」

解説 「この続き、アマゾンプライムで観れます?」

④のシチュエーションの人達、全員はける。その後⑤のメンバーが出てくる。

実況 「観れないと思います。えー…そして次が、ラストみたいですね。今のこの空気感から一体どんなシチュエーションがくるのか」

解説「最後まで楽しみです」

実況「えー最後は審査員の皆さんに見守られながら、ラストシチュエーション、スタートですー！」

⑤やべえ世界

舞台はどこか。舞台中央に1と2がいる。実況と解説、審査員の3人もいる。

2 「(1に) メポメポメポ〜マグナマグナカル〜タ！サビサビサビ〜サービスマ
ンー！」

銃声。倒れる2。上手から銃を持った3が出てきて1に近づく。2の横を通り過ぎると2が起き上がる。

2・3 「(1に) マグナマグナマグナカル〜タ！カルタカルタカ・ル・タ！と！(こ
こからゆっくりと) ひやく、にん、いっしゅ、と」

上手から4、下手から5が出てきて2と3に合わせる。

2・3・4・5 「(1に良い声で歌うように) 賢者のい〜しゅ！」

実況「はい、シンプルにやべえところですよー！」

解説「最後の最後にシンプル。しかしこうやって見るとやはりシンプルが一番やべえです
ね」

実況「シンプルイズベスト！」

解説「おそらくあの真ん中の人(1)は異世界に飛ばされたか精神世界に迷い込んでしま
ったとか、」

1 「(2〜5を順番にチョップしながら) マグナ！マグナ！マグナ！ワンナップキノ
コー！」

1〜5 「マンマミ〜ア！！」

解説「はい、あの人もやべえ人でした〜」

暴れまわる1〜5。

実況「え？でもこれ、收拾つかなくないですか？大丈夫なのこれ？ちゃんと終わるの？」

解説「審査員達の顔にも不安の色が、」

審査1 「マンマミ〜ア！」

審査2 「ペナルティチョップ！」

審査3 「オラウータン！」

審査員1〜3も1〜5の輪に入る。

実況 「これは伝染してしまうのかー!?…うっ!…うう…!」

解説 「え?ちよつと斉藤さん?斉藤さんもですか?ちよつと私1人になるのは、」

実況 「うううう…!」

解説 「マンマミ〜ア!」

実況 「お前がなるんかい!」

解説もやべえ輪に入る。

実況 「…はい、ということまで!最後はこの会場がやべえ感じになってしまったところで!

今回の選手権はここまでとしましょう!荒原さん、今回は如何でしたでしょうか?」

解説 「光と闇」

実況 「はい、ありがとうございます。では皆さん!また次回のやべえとこきちった選手権でお会いしましょう!さよなら〜!」

徐々に暗転していく中で実況もやべえ輪に入る。しかし実況以外は落ち着き、実況を冷めた目で見える。

実況 「…え?」

完全暗転。

(終)

「スカイシヤーク」

【登場人物】

リーダー（ユウジン）

ケンシ

カホ

カズヤ

フミヤ

依頼主

FBIの人

エスパ

女の子

【OP】

舞台にリーダー、ケンシ、カホ、カズヤ、フミヤの5人がいる。
明転。

リーダー「僕の名前はユウジン。天才集団スカイシャークをまとめるリーダーさ。そんな僕のIQは192。あのインシュタインでもIQは160だ。世界でも屈指の頭脳を持っている」

リーダー「彼はケンシ。パソコンでできることなら何だってこなせる、天才ハッカーさ」
→台詞中、ケンシがマイムでカッコつける。

リーダー「彼女はカホ。一度覚えたことは決して忘れることのない、記憶力の天才だ」
→台詞中、カホがマイムでカッコつける。

リーダー「彼はカズヤ。一度身体を触ればその人のことがなんでも分かってしまう、天才整体師さ」
→台詞中、カズヤがマイムでカッコつける。

リーダー「彼はフミヤ。遊戯王、ヴァンガード、シャドウバースから坊主めぐりまであらゆるカードに精通しているカードゲームの天才だ。お察しの通り、このチームのお荷物だ」
→台詞中、フミヤがマイムでカッコつける。

リーダー「この一癖も二癖もある天才達をまとめるのは、IQ192の僕、ユウジンさ。もう一度言う、あのインシュタインでもIQは160だ。その差32」

リーダー「天才集団、僕らはチーム、スカイシャーク」
5人、正面を向いてポーズを決める。

カズヤ「第一話。僕らは、スカイシャーク」

【第一話】

舞台は事務所。5人がいる。ケンシはパソコン、フミヤは地べたでカードに夢中。

カズヤ「お前らシマウマの鳴き声を知ってるか？シマ、ウマだからってヒヒーンじゃねえぞ」
カホ「誰に聞いているの？それくらい知識だったら入っているに決まってるでしょ」
カズヤ「おっとカホ、お前は回答者じゃない。お前とやったらクイズにならないからな」

リーダー「カズヤ。クイズというのは答える者がいて初めて成立する遊びだ。僕もケンシも興味がない。よってカホに答えてもらわないとそもそもクイズが成り立たない」
カズヤ「じゃあ興味を持ってくれよ」

カホ「答えは『わんわん』ね」

肩をすくめるカズヤ。

ケンシ「だったらお前（カズヤ）と同じ鳴き声じゃないか」

カズヤ「誰が犬だ！確かに夜は、オオカミだけだな」

ケンシ「…朝っぱらから下ネタかよ」

カズヤ「おや？嫌いだっただけかな？」

ケンシ「大好物だよ」

カズヤ・ケンシ「ははは！」

フミヤ「しゃあ！エクゾディア揃ったー！次は坊主めくりやろ」

ドアを叩く音。真ん中から焦った依頼主がやってくる。

依頼主「突然の訪問ですまない。ここか？どんな問題でも解決してくれるチームがいるってところは？」

カズヤ「おいおいどうしたそんなに慌てて？エイリアンにでも襲われたのか？」

ケンシ「だったらこんなところじゃなくNASAか、頭の病院にいきな」

カズヤ・ケンシ「ははは！」

カホ「二人とも、まずは話を聞きましょうよ」

リーダー「その必要はないよカホ」

依頼主「え？」

リーダー「まずその恰好、外行きに着慣れていないスーツだ。そしてオシヤレを捨てた機能重視の鞆。口元には時間短縮・栄養満点カロリーメイトの食べかす。外には見なれない1台の車、運転手はあんた（依頼主）だな。…カズヤ」

カズヤ「ああ（依頼主に近づき）…ちよつと失礼」

カズヤ、依頼主の身体全体を触っていく。

カズヤ「なるほど、この筋肉の付き方…普段仕事で歩き回ったりはしていないな。腕、肩、そして特に目もとに疲労が溜まっている。つまり、脳への負担が大きい仕事をしているな」

リーダー「以上の情報から考えられる職業は何かの研究者。そして今の時刻は午前10時前。

朝一で仕事場から車でここへ駆け付けたとなると、範囲は40〜60キロ以内だ。カホ、この範囲内で研究所を持つ企業は？」

カホ「トライアングル製薬、クロサワ製鉄、ABC株式会社ね。ただこの中で1つホットな企業があるわ。2日前、この辺りで悪質なサイバー攻撃があったの。その被害を受けた企業の一覧に、トライアングル製薬の名前が載ってた。新聞の隅っこにね。因みにその犯人はもう捕まったはずよ」

リーダー「しかし研究所のデータはすでにどこかへ流出した可能性がある。一度漏れたデータの流出先を調べるのは困難。そこで、あんたの代わりにそれを調べれば良い訳だ。

ケンシ「

ケンシ「もうやってる。トライアングル製薬のデータ中枢部にハッキングしてみた。そしてここから逆探知してデータ流出の跡をたどる訳だけど…残念、今日中には無理だよ」

リーダー「30分後から始まる『けものフレンズ』の1挙放送を見なかったら？」
ケンシ「…3時間で終わる」

カホ「さてあなた…あら？まだ名前も聞いてなかったわね」

カズヤ「それに立ちっぱなしだ」

リーダー「挨拶が遅れたね。ようこそ、スカイシャークへ」

依頼主「皆さん…私、犬のジョンを探してもらいたくて、来たんですけど…」

4人「……………」

カズヤ「…犬と言えば、シマウマの鳴き声は」

依頼主「ワン、ですよね？」

4人「……………」

フミヤ「坊主！蟬丸かよ！畜生…一番熱いわこのカードゲーム」

間

リーダー「僕らはチーム、」

5人「スカイシャーク！！（正面を向いてポーズを決める）」

依頼主、怪訝な様子ではける。

ケンシ「第二話、新メンバー」

【第二話】

舞台は事務所。5人がいる。

FBIの人が真ん中から入ってくる。

FBI 「邪魔するぞスカイシャーク」

リーダ 「あんたは：FBIの偉い人」

カズヤ 「FBIの偉い人じゃないか」

FBI 「そうだ。私は偉い人だ。今日はキミ達に新メンバー、新たな天才を紹介したいんだ」

カズヤ 「おいおい。ジャパンのアイドルグループじゃないんだ。そんなほいほいメンバーは
いらないぜ」

ケンシ 「ただでさえ、ここにはお荷物が1人いるってのに」

肩をすくめるフミヤ。

FBI 「まあそう言わずに、会うだけ会ってみてくれ。入って良いぞ」

エスパーが真ん中から入ってくる。

エスパー 「よろしくお願いします」

FBI 「彼はラエル君：超能力者、天才エスパーだ」

4人 「は？」

リーダ 「いやいや頭でもおかしくなっちゃったのかFBIの偉い人」

カズヤ 「偉い人」

ケンシ 「エロイ人」

FBI 「エロくはない。彼は幼い頃、その力に目覚めてな。FBIの施設で極秘に面倒をみていたのだが、そろそろその力を世に役立ててもらおうと考えてな。試しにここで使ってみてくれないか？」

リーダ 「：まああんたには世話になってるからな」

カホ 「それに、フミヤよりは役に立つんじゃない？」

肩をすくめるフミヤ。

FBI 「ありがとう。さて、ここからは仕事の話なんだが」

カズヤ 「おいおいそっちが本題か？」

ケンシ 「お前（エスパー）、だしに使われただけか？」

FBI 「政府の要人ケン・ターキー氏の1人娘が3日前から行方不明だ。おそらくは誘拐事件だろう。しかしターキー氏は公にはしたくないとのことだ。極秘任務になる。できるか？」

リーダ 「：何か情報は？流石に何もなければ何もできない」

FBI「…すまんが手がかりは、行方不明になる直前偶然撮られたこの1枚の写真しかない」

FBI、写真を机の真ん中に置く。皆、中央に集まる。

FBI「しかもこの写真、その娘と事件に関わっているであろう男が写っているのだが、男の方は後ろ姿しか写っていないんだ…」

リーダ「おいおいFBIの偉い人…僕は何もなければ何もできないと言ったんだ。(写真を指しながら) あるじゃないか、充分だ」

FBI「スカイシャーク…」

リーダ「すぐにこの写真からこの男について割り出そう。おっと早速ヒントを見つけた。皆、ここを見てくれ」

エスパ「(写真の端っこに触りながら)…この男性の名前、悪田悪男さん、ですね」

リーダ「…は？」

エスパ「あいえ、自分、今この写真の残留思念を読み取って、あ、サイコメトラーって言うんですけど、その力で、名前くらいなら分かるんです」

リーダ「へー…そうなん…？まあ…別に…うん」

カホ「ちよつと待って」

リーダ「カホ…？」

カホ「悪田悪男と言えば…18年前に壊滅した極悪犯罪組織、めっちゃ悪団のメンバーよ！」

リーダ「カホ！」

カホ「この男だけ警察の手から逃れていたのね…18年前の資料はない？私の記憶と照らし合わせてすぐにアジトの目星をつけるわ！」

リーダ「皆！急いで資料を集めろ！」

エスパ「(頭に手を置きながら)悪男さん、見つけました」

リーダ「カホ…は？」

エスパ「あいえ、自分、名前が分かれば千里眼って力でその人がどこにいるのか分かるんですよ。(頭に手を置きながら)あーってことは、ここがアジトなのかな？ワルイー町西区の1-1ですね。あ、怯えてる女の子も1人いましたよ」

カホ「へー…よかったじゃん」

リーダ「すごいすごい」

リーダ「カホ…」

ケンシ「思い出した！」

リーダ「ケンシ…？」

ケンシ「めっちゃ悪団のアジトと言えば…そのセキュリティは超一流！潜入するのは困難を極める鉄壁の砦だ！でもここには、俺がいる」

→台詞中、エスパーが一旦はける。

リーダー「ケンシ！」

ケンシ「面白いよ！アジトのセキュリティと俺の腕…どちらが優れているのか、」

エスパー、酷く怯えた女の子と一緒に再び入ってくる。

エスパー「テレポーターションで誘拐された子連れてきました」

リーダー・カホ・ケンシ「……」

カズヤ「その子！極度の緊張で身体がこわば、」

エスパーが女の子に手をかざす。『ばあぁー』とごうSE。

エスパー「ヒーリング効果のある念波を送りました」

女の子、めっちゃ元気になってはける。

間

FBI「…どうだ彼は？スカイシャーク」

リーダー「いやカードでフミヤ倒してみろよマジで」

ケンシ「いやカードでフミヤ倒してみろよマジで」

フミヤ「じゃあ遊戯王カードやろうぜ！」

間

リーダー「僕らはチーム…」

6人「スカイシャーク！！（正面を向いてポーズを決める）」

リーダー「いやお前（エスパー）はちげーよ。入ってくんなよ」

カズヤ「お前ホントアベンジャーズの世界とかいけよ。ここじゃねえんだよ」

リーダー、ケンシ、カズヤの3人でエスパーとFBIをはけさせる。

カホ「第三話。さらば、スカイシャーク」

【第三話】

舞台は事務所。5人がいる。

FBIの人が入ってくる。

FBI 「新メンバーを紹介したい」

リーダー 「もう来んなや！」

カズヤ 「帰れ！」

ケンシ 「エロイ人！」

FBI 「エロくはない。今回は事務ができる人を紹介したいんだ」

カホ 「ああ事務ね。確かにそれなら助かるわ」

リーダー 「まあとりあえず、聞いてみるか」

FBI 「2人の女性から応募があったんだが（履歴書を2枚取り出す）：気になった方を選んでくれ。まずは1人目。シャーリー・ビンガムさん。36歳。大企業クロサワ製の総務経験有り。簡単なプログラミングもできる程PCの扱いに長けている。アピールポイントとしては、料理も得意、とのことだ」

カホ 「ふーん。事務職としてはまあまあ優秀ね」

カズヤ 「このチームのお母さんになってくれそうだな。ははは」

FBI 「2人目はサニー・レタスさん。19歳。三角大学に通う学生だ。実務経験はないが、一生懸命頑張ります、とのことだ」

カホ 「ちょっとこれは…話にならないわね」

ケンシ 「バーガーショップの店員と勘違いしてるのかもね。ははは」

FBI 「ただ写真から見るとこの子は…：巨乳だ」

間

カホ 「何言ってるのあんた？」

リーダー 「おいおいエロイ人…一応履歴書確認しておくか」

ケンシ・カズヤ 「一応な」

カホ 「お前ら…」

リーダー、カズヤ、ケンシの3人、FBIの持つ履歴書に集まる。

リーダー 「うーん…」

カズヤ 「はいはいはい」

ケンシ 「なるほどね」

3人 「巨乳だ」

カホ 「うるさいよ」

3人 「(FBIに1人ずつテンポ良く)サンキュ」

カホ 「小声でお礼言ってるじゃないよ。え？まさかあんた達、胸が大きいってだけでサニ

ーさんを選ぶつもり？」

リーダー「待って待って、何か勘違いしてないかカホ？」

カホ「え？」

リーダー「巨乳っただけで選ぶ訳がないだろう。この子に特筆すべきところを見つけたんだ」

カホ「そうなの？（リーダーに近づく）」

リーダー「この子の額と目の下をよく見てみる。小さなほくろがあるだろう？そこにある子は、

エロイ」

カホ「なんだその理由。ふざけてんのか」

リーダー「ケンシ」

ケンシ「データでも出てるよ（パソコンを見せる）」

カホ「いやどうでも良いわ」

リーダー「カズヤ」

カズヤ「履歴書を見ながら手を出す）…♀カップだね」

カホ「なんで今言った。カップ数の話ホントどうでも良いわ」

リーダー「何が不満なんだカホ？職場に1人おっぱい、女性が増えるだけじゃないか」

カホ「言い間違えんなよ。そういう不純な動機なのが嫌なのよ！そもそもこのチームには

…私がいるでしょうよ」

カズヤ「今おいくつでしたっけ？」

カホ「29」

3人「ハンっ（小馬鹿にした笑い）」

カホ「おいこらクソども。ああじゃあもう良いですよ。そんな態度とるんだったらねえ、

私がこのチーム抜けるからね！」

フミヤ「立ち上がる）ちよっと待ってよ！さっきから聞いてたけど…良い加減にしなよ！」

カホ「フミヤ…」

フミヤ「もう僕だつて我慢できないよ。スカイシャークは最強のチームだろ？簡単に抜ける

とか言ってるんじゃねえよカホ！」

カホ「あ、私が怒られてたのこれ？あっちの3人を怒りなさいよ！」

フミヤ「いや僕だつて巨乳が良いし！」

カホ「お前もかい」

リーダー「まあフミヤも言ってるんじゃあ、決まりかな？」

電話音。

FBI「(電話に出る) はいもしもし。あ、サニー・レタスさん。はい、はい、え？パーガ

ーショップと応募先を間違えてた？あー分かりました。スカイシャークは全然違うということですね。はい、分かりましたー(電話を切る)。じゃあ、シャーリー

さんの方で」

FBIの人、はける。
間

リーダー「僕らはチーム、」

4人「スカイ、」

カホ「(リーダーにビンタする) 終わらせねえよ馬鹿」

リーダー「……スカイ、」

フミヤ「(カホにビンタされる) 僕かい」

カホの説教(ビンタ)の中、徐々に暗転していく。

音声『僕らはチーム、スカイシヤ(ビンタされる)……あのホントもう、すいませんでした
……』

(終)

「光と闇」

【登場人物】

演出

助演出

団員 1 / 殺し屋

団員 2 / 相棒

団員 3 / 本物ボス

団員 4 / 刺客 1

団員 5 / 刺客 2

役者 1 / ヒロイン

偽ボス

アイドル / ライバル

マネージャー

舞台上に演出、助演出、団員1、団員2、団員3、団員4、団員5、役者1がいる。明転。

演出「えー明日から我々劇団クロサワの新作公演『光と闇』が上演となる訳だが」
他7人「はい！」

演出「今回の作品は脇役も含め、全てのキャラクターを大切にしてきた。葛藤しながらも殺し屋をやめようとする主人公（団員1）、恋心を隠しながら主人公を助ける元相棒（団員2）、裏の組織のボス（団員3、仮面を見せる）、主人公に向けられる刺客達（団員4・5、自分の装備を見せる）、そして裏の世界を知らないヒロイン（役者1）。確かにこの物語が盛り上がるのは組織にヒロインが攫われた後の後半だ。しかしそこに至るまでの過程、前半こそがキャラを魅せる大事な時間。そこを丁寧に描いたつもりだ。そのための2時間なんだ」

助演出「演出。役者全員にそのお気持ち、届いてますよ」

団員4「俺の出番は前半だけですが、主役のこいつ（団員1）を食ってやりますよ！」

団員5「馬鹿。私の方があんたより目立ってやるわ！」

団員3「そんなこと言ってお前ら、台詞とちるなよ」

団員4・5「やっべー！」

全員「ははは！」

役者1「私も皆さんに負けないよう、頑張ります……！」

演出「國部君。キミはオーディションから光るものがあつた。キミの演技力は本物だ。オーディションで見せてくれたような世界観、イメージを丸ごと創造してしまうリアルな芝居を見せてくれ。期待している」

役者1「はい！」

演出「そしてこの後、今公演のゲスト、ボスの右腕にして主人公の最大のライバルをやってくれる神山君が合流する。彼が到着するまで、楽屋で待機だ！（上手側を指す）」
団員1〜5・役者1「はい！」

団員1〜5、役者1、下手からはける。

助演出「楽屋：あっち（下手）なんですすけどね」

演出「…そうか」

助演出「でも、大丈夫なんですかね？神山さん。いくら人気急上昇中のアイドルとはいえ、あんまり練習に参加できなかったじゃないですか？」

演出「心配するな。彼もプロだ。これからのリハーサル、ゲネでしっかり合わせてくれるわ」

助演出「まあでも彼の人気のおかげで、いつもの倍以上お客さんの予約が入ってますからね。」

あんまり文句も言えませんが」

演出「古澤君、彼は客寄せパンダじゃない。集客も大事だが、舞台が始まればただの1人の役者だ。舞台上の彼を、評価しろい！」

助演出「はい、すみません。その通りです」

マネージャーが上手から入ってくる。

マネ「(すごい訛りながら) どうも〜今回はよろしく願いしますう」

助演出「あの…すみませんどちら様で…？」

アイドルが上手から入ってくる。

助演出「あ、神山さん」

マネ「あくすんません。いつものマネージャーはちよーつと急病で休んでるんでえ、チーフマネージャーの私が代わりにやって来ましたあ」

助演出「そうだったんですか…あの…けっこう独特な、訛りで…」

マネ「(照れながら) それほどでもねえです〜」

助演出「別に褒めては…ないですけどね。今回は、よろしく願いします。それではこれからすぐにゲネとなりますので、準備の方よろしく願いします」

マネ「あーすみませんその前に、ちよーつとだけよろしいでしょうかあ？」

助演出「何か？」

マネ「ちよーつと内容、台本の方を確認させてもらったんですがあ。前のマネージャーがちよーつと見落としてた所がありましてえ、ちよーつと一部変更してもらいたいところがあるんですよお」

助演出「え？」

マネ「一応この子人気アイドルですからあ、物語後半で舞台に出てきたらあ、もう最後までずつと出ずつばでえ、はけさせないようお願いしたいんですよお、ええ」

助演出「え？…いやいやしかし、主人公の敵ですから、倒されたらそのままはけないと意味分かんないですよ？」

マネ「あーそれもなんですけどお。あ、敵役としてねえ、出るのは良いんですよ。そこはあ。ただちよーつとお…主人公に負けるのはNGでお願いしますう」

助演出「は？」

マネ「いやアイドルなんでえ。負けた姿を舞台では見せられないんですよ」

助演出「いやちよつと今更何言って、」

助演出を手で制する演出。

演出「マネージャーさん…OKです」

助演出「演出？」

演出「一度登場したら最後まで出さずっばで、主人公に負けない、OKですー」

助演出「ちょっと演出、何言ってるんですか？」

演出「いやーこんな人気アイドルさんに出て頂けるんですからそれくらいの変更は致しますよー(助演出に)お馬鹿！チーフマネージャーさんだぞ！？ここで急遽出演キヤンセルとかにさせられたら何人お客様が減ると思ってるんだい！」

助演出「結局集客が一番に考えてるじゃないですか！」

マネ「話の分かる演出さんでよかったです。それでまだいくつかあるんですけどお」

演出「はいはい」

マネ「主人公との殺陣があるじゃないですかあ？それもちよつとですねえ…彼ちよつと足を痛めてしまってます…」

助演出「え？大丈夫なんですか？」

マネ「筋肉痛なんですけどお」

助演出「ふざけてんのか。それくらいだったらやれよ」

マネ「なのでえ、あんまり足で動き回る殺陣はNGでお願いしまあす」

演出「OKですー」

マネ「あそこの子忙しくてまだ台本覚えてなくてえ」

助演出「は？」

マネ「すぐに覚えられるよう、全部短い台詞に直してもらおう感じでお願いしまあす」

演出「OKですー」

マネ「ただですねえ、お客さんにい、アイドルなのに台詞少くない？って思わせたくないでえ、その辺の上手い理由付けもお願いしまあす」

演出「お願いされましたあー」

助演出「NGって言葉消えたの？頭から」

マネ「そしてこの子今、近未来SFロボットアニメ『アンドロイドマン』の声優もやってるんでえ、その宣伝も上手い感じに入れてくださあい」

演出「アンドロイドマン！」

助演出「世界観大丈夫？そんなロボットアニメの宣伝入れて」

マネ「あとこれすごい大事なお話なんですけどお、この子実は共演NGがありましたてえ」
助演出「いやいや今更そんなこと言われても！もう今からキャスティング変えられる訳ないでしょう！」

マネ「舞台にい、絶対動物は出さないでください」

助演出「出す訳ねえだろ。舞台なんだと思ってるんだよ」

マネ「じゃあ安心ですう」

助演出「あんたの村では出たりすんのかな？動物が」

マネ「最後にい、明日の公演終わった後この子の握手会とチェキ会も入れたいのでえ」

演出「入れましょう入れましょう！」

マネ「ただその後すぐ他の仕事もあるんでえ、握手会とチェキ会の時間分ですnee、公演時間の方ちよーっと短くしてもらって良いですかあ？」

演出「しちゃいましょうしちゃいましょう！」

マネ「じゃあ2時間から10分程：にしちゃいましょう」

助演出「10分！？引くとかじゃなくてそのまま10分間の公演！？」

演出「ははは、斬新！」

助演出「笑ってんじゃneeよ。さっきあんなに公演時間にこだわり持っていましたよね？え？

別人？あなたさつきとは別の人なの？」

演出「古澤君：俺はこんな人間だ」

助演出「ビッグダディか。いっそ別人であってくれえ」

マネ「一応最後に確認ですが：！動物だけは、」

助演出「出さないです、それだけは。過去にどんなトラウマがあったんだよ」

マネ「それじゃあそんな感じで、よろしくお願いしまあす」

マネージャー、上手からはける。アイドル、会釈して下手へはける。

演出「よし：帰って寝るか？」

助演出「現実を見てください。全部あなたが引き受けたんですよ？」

演出「：分かっている。古澤君、キミは明日までに各メディアに公演時間変更等の連絡や修正を頼む。俺は今の変更点を、メンバー達と何とかする」

助演出「いやいや明日までにさっきの変更点全部は絶対に無理ですよ！」

演出「無理かどうかじゃない：やるしかないんだ」

助演出「演出：いや今更カッコつけられても無理ですよ？」

肩をすくめる演出。

弱明。後ろの幕が半分まで開き、舞台後ろ中央に（上手から順に）マネージャー、

助演出、演出が並んで立つ。

音声『まもなく、劇団クロサワ第30回公演「光と闇」の開演となります』

舞台後ろ中央にスポットライト。

マネ「昨日私が言ったことは大丈夫ですかあ？」

演出「ええ、全部問題無いです」

助演出「ホントに全部要望通りにできたんですか？」

演出「ああ」

助演出「公演時間も、10分に？」

演出「ああ」

助演出「イカれてやがる」

ブザー音。全体明転。殺し屋が下手から、ヒロインが上手から出てくる。

殺し屋「俺は孤高の殺し屋ケン：裏の世界を生きる男」

ヒロイン「私は都内で暮らす花屋のハル。表の世界を生きる女」

OP風のBGMが流れる。ステップを踏む殺し屋とヒロイン。

助演出「あーなるほど。前半のストーリーをOP風のダイジェストで見せるって訳ですね。

1時間以上あった前半をどのようにまとめたのか、」

そこに上手から組織のボス（仮面を付けている）と刺客1、『組織のボス↓とその刺客達↓』と書かれた看板を持った刺客2が現れ、ヒロインを強引に攫っていく。

BGMも突如終わる。

助演出「終わったー！？え？もうヒロイン攫っちゃうですか？あれじゃお客さん何も分かんなくないですか？」

演出「あれが最善策なんだ。因みに今ので刺客達2人の出番は、終わりだ」

助演出「かわいそう！あいつら脇役だけどあんなに今回の舞台張り切ってたのに」

殺し屋「くっ…俺が裏の組織を抜けたことが原因でハルを攫いやがって…！許さねえ…！もう握らないと決めたこの愛銃『スカイシャーク』を再び持って、乗り込むしかない…！」

助演出「めちゃくちゃ補足説明してくれてる…」

相棒「待って！」

相棒が下手から出てくる。

殺し屋「セクシートモミ！」

助演出「あ、よかったー。流石に相棒の子にはちゃんと出番があるんですね」

相棒「行くのはやめて、危険過ぎる。私ね、相棒としてあんたと仕事をしていくうちに恋

心が芽生えていったの。だけど組織を抜けたあんたの闇を払うことは、表の人間であるハルにしか、できないか。だったら仕方ない。私は黙って、身を引くか」

相棒、下手へはける。殺し屋、足踏みして上手側へ進むマイム。

助演出「何しに出てきたんだよ！言いたいことだけ言って帰ってっただけだよ！」

演出「あれが最善策なんだ」

助演出「黙って、身引いてないしね。全部喋ってたしね」

殺し屋「着いたか…。いくぞ、スカイシャーク…！」

ライバル「待て」

ライバルが上手から出てくる。

マネ「出てきましたね。うちの子お。台詞の方はあ覚えやすいよう短くう？」

演出「見ててください」

殺し屋「お前は…俺の親友にして組織ナンバー2の殺し屋、」

ライバ「カラス丸」

殺し屋「だったな。組織を抜けて以来だ…。お前とくらは、何か言葉を交わして消えたかったが」

ライバ「ふっ」

殺し屋「必要はない、ってか。相変わらずドライブだぜ。しかしお前がここに来たっことはやはり刺客として俺を迎え撃つと、そういうことか！」

ライバ「(食い気味にキツと顔を殺し屋に向け) 俺は」

殺し屋「お前を殺す、とそういう決意を雰囲気から感じ取れたぜ！」

助演出「短くしたねえ台詞！ケンがすごい察しの良い人みたいになってたよ！」

演出「あれが最善策なんだ」

助演出「というかマネージャーさんもあんな感じで良いんですか？」

マネージャー、助演出の顔を見た後、親指をぐっと立てて頷く。

助演出「良いんかい」

マネ「まあまあまあただう台詞が短い理由付けはあ、ちゃんとお願いますよお」

殺し屋「ふっ、そうだな。そろそろお喋りの時間は終わりにしよう。確かに日本語での会話は難しいもんな、外国人のお前には」

助演出「理由付けそれ！？随分と雑だね！」

マネージャー、親指をぐっと立てて頷く。

助演出「良いんかい！あれで」

マネ「こちらとしても急な要望だったんでえ」

助演出「その物分かり良いんかい。だったら最初からその物分かり見せてくれよ」

マネ「次は殺陣のシーンですかねえ？ここもお願いしますよお」

助演出「ああなんか、あんまり動けないんですっけ？筋肉痛で。なんだその理由」

殺し屋とライバルが銃を持ってにらみ合っている。先にライバルが銃を撃つ。派手に避ける殺し屋。そのまま低姿勢でライバルに銃を撃つ殺し屋。それを手で防ぐライバル。『ガキン』とびつてSE。

助演出「は？」

そのまま殺し屋は派手に動き回り、ライバルの発砲を避ける。ライバルはその場から動かず、殺し屋の発砲を全て手で防ぐ。『ガキंगाキン』とびつてSE。

助演出「え、いや、あれは…？」

演出「分からないか？バリヤーだ」

助演出「小学生か。もうちよっとマシな案あったでしょうよ」

演出「あれが最善策なんだ」

助演出「ずつとうるせえなそればっか！ほら、今度はマネージャーさんも微妙な顔だよ」

マネ「まあまあまあでもお…あの子が主役に負けなければあ、それで良いでしょう」

助演出「それも意味分かんないけどね」

殺し屋、ライバルの心臓に銃弾を撃ち込む。

助演出・マネ「え？」

倒れるライバル。目を閉じ腕を組む演出。

マネ「演出さん…これは、どういうことですか？」

助演出「演出…まさか…！やはりここだけは譲れないと…！」

『ウーン』という音と共に起き上がるライバル。

殺し屋 「この機械音…まさかこいつ、今絶賛放送中のSFロボアニメ『アンドロイドマン』

のような改造を体に施されているのかー！」

刺客 「日曜夕方5時から放送中（＜サインをする）」

助演出 「ここでアニメの宣伝入れてきたー！！」

マネージャー、『うんうん』と頷く。

助演出 「あ！まさかさっきのバリヤーもロボであることの伏線だったの！？」

ニヤリとする演出。

助演出 「その顔ムカつく〜」

殺し屋 「くっ…！ロボの体では普通の攻撃をしてもダメージを与えられない…！」

ボス 「くっくっく！手こずっているようだな、殺し屋ケンよ」

ヒロイ 「痛い…！どこに連れていくの…！」

仮面を付けたボスと両手を縛られたヒロイが出てくる。

助演出 「あーそしてここでボスとヒロイを出すんですね」

殺し屋 「ハル！」

ヒロイ 「ケンさん…！…ひっ！」

ヒロイン、ボスの隣にいる何かに怯えている。

助演出 「あれ？でもなんかちょっと怯え過ぎじゃないですかね國部さん。やっぱり初舞台で

緊張して、」

演出 「お前…視えないのか？」

助演出 「え？まさか？」

演出 「やはり緊迫した状況でこそ彼女の演技力は発揮される。あのリアルな演技力によつて、彼女は再びイメージをこの世界に創り出してしまったようだ…！視える、視えるぞ…！」

助演出 「この流れ見たことあるよ」

演出 「あの娘が怯えているのはな、ボスではない。ボスが連れてきている、ペットの虎にだ！」

助演出 「虎！？いや確かに組織のボスって大型の獣飼ってるイメージあるけど！今虎がイメージで出てるんですか！？」

演出 「ああ、俺は確かにボスの隣に虎が視える」

マネ「あくやっぱりあれえ、虎ですよねえ…」

助演出「あなたにも視えてるんだ！？虎が」

マネ「ということは…舞台に動物出てるじゃない！」

助演出「あ」

マネ「動物NGって言ったでしょうがぁ！」

助演出「そんなこと言ってたな！確かに！」

マネ「確認までしたのにい！しかも虎って…イカれてんのお？」

助演出「いやでもあれ、実際の動物ではなく、イメージなんですよ」

マネ「…はあ？」

助演出「まあ普通は意味分かんないか…ちよつと説明難しいな…あ、でも神山さんが視えない人だったら」

ライバル、イメージの虎にめっちゃビビっている。

マネ「ほらもううちの子、めっちゃビビっちゃってんじゃん！」

助演出「あの子も視えるのか…」

マネ「NGって言ったのにい…これは契約違反ですう！すぐに公演を中止させて頂きます

よお！」

演出「ちよちよちよ！ちよちち！ちよちち待ってください！」

助演出「テンパらないでください演出」

演出「俺は極めてクールだ。大丈夫です。裏にいる役者を出して、なんとかします」

演出、上手へはける。

助演出「どうするんだ…？」

殺し屋「組織のボス！その娘には手を出すな！」

ヒロイ「ケンさん…！」

ボス「安心しろ。お前が抵抗しなければ、堅気の女には、手をださん」

そこに上手から団員5が現れ、ヒロインのお腹を殴る。ヒロイン、ガクツとなる。

演出も上手はけ口から顔を出している。

殺し屋「ハル…！！！」

助演出「何やらせてんだよ！」

団員5、上手からはける。演出、上手から戻ってくる。

演出 「これが、最善策だ」

助演出 「もう良いよそれ」

演出 「聞け。これで彼女が気絶してくればイメージの虎を消し去ることができるはずだ」
ヒロイ 「うう…なんて卑怯な奴ら…!」

助演出 「全然意識ありますけど。そりゃ、あれくらいじゃ気絶しませんよ」

演出 「おかしい…漫画だと上手く気絶するのに…!」

助演出 「あー何にもクールじゃねえこの人」

ヒロイ 「こんな拷問くらいで…私は倒れたり、苦しんだりしない…!だってケンさんの方が…よっぽど苦しい思いをしているから!」

助演出 「逆に役に入り込んでるじゃってるしあの娘」

ヒロイ 「私のことは構わないから…!この人達を倒して!ケンさん!」

演出 「これはまずい…!彼女が役に入れば入る程…!周りのイメージはよりリアルになる!本物として顕現される!」

『ガオオオ!』という虎の鳴き声がする。殺し屋、ボスもその声に反応する。

助演出 「私にも虎の鳴き声が聞こえました!役者達も全員聞こえてるみたいですよ!」

演出 「出るぞ…よりリアルな、本物の虎が!」

上手からぬいぐるみの虎を持った黒子が出てくる。

助演出 「あー…思ったより…小さい、可愛らしい感じですね…!」

演出 「見た目に騙されるな。虎は虎だ…!慎重に対処法を考え、」

マネ 「やはりこのまま公演を中止にしましょう」

演出 「(舞台に向かって)今すぐその虎を追い出せ…!」

助演出 「切り替えはえーなあ」

殺し屋とボス、戸惑いながらも目を合わせ頷き、虎(黒子)に構える。

演出 「いけ!」

殺し屋とボス、協力して虎(黒子)を追い払おうとするが、すばしっこく、中々攻撃が当たらない。そこにヒロイン、黒子自体を蹴って動きを止める。

黒子 「いたっ…!」

そのまま殺し屋とボス、黒子をボコボコにする。

助演出「あつちに攻撃するの、有りなの？」

演出「あつちってなんだ？ちゃんと虎にやってるだろ？」

助演出「ああ：はい、そうですね…」

そのまま虎を持った黒子を上手からはけさせるボスとヒロイン。

間

ボス「くっくく！手こずっているようだな、殺し屋ケンよ」

ヒロイン「痛い…！どこに連れていくの…！」

上手からボスとヒロインが再び出てくる。

助演出「しれっと登場シーンから仕切り直したぞこいつら」

ライブ「(キリッと) ボスが出てくるまでもありませんが」

助演出「こいつも何事もなかったように仕切り直しやがって」

マネ「もう、動物が出てきたりはあしませんよねえ？」

助演出「あーはい、流石にもうこれ以上イメージのキャラが出てくることはないと思います
けど」

団員3「すみません遅れました！！」

団員3が上手から(演出側に)出てくる。

演出・助演出「は？」

団員3「昨日の変更点を覚えるために徹夜したら、寝坊してしまいました！本当にすみません！！」

助演出「いやあのキミ：荒原君だよね？ボス役の」

団員3「はい！本当にすみませんでした！今すぐ本番入りますので！！」

団員3、はける。

助演出「あの一演出：今舞台に出てるボスって、誰か脇役の人が代役してるんですか…？」

演出「いや、それはないな…さっき1回楽屋裏行った時、脇役達は揃っていたからな…」

助演出「…じゃあ何？今舞台に出てる、最初から出てたボスも、元々あの娘が出してたイメ

「ジの人だったってこと！？確かに國部さんと同時に出てきたけど！」

演出「ずーっとイメージで出ていたのか…！言われてみれば、荒原と雰囲気全然違うな…」

助演出「じゃあもう逆に荒原君、舞台に出さない方が良くないですか？」

本物ボス「くっくっく…！」

演出「もう、遅いようだ…」

本物ボス「待たせたな、殺し屋ケンよ…！」

本物ボス、上手から出てくる。呆気にとられる舞台上の役者達。

助演出「ほら皆キョトンとしちゃってるよ」

本ボス「(偽ボスに小声で) もうほら、代わりは、大丈夫だから、もう大丈夫だから」

助演出「いやいや違うんだよー荒原君」

ヒロイ「ボスが…2人!？」

助演出「いやあんたが原因のことよこれ。あの娘今からでも退場させた方が良くんじゃないですか？」

演出「いやあの娘なら、何とかしてくれる…！」

助演出「演出…考えるのやめただけじゃないですよね？」

ヒロイ「ちよっと待って…」

助演出「え？」

ヒロイ「この人(刺客)の体は改造されたロボット…つまりこの組織の科学技術は凄まじい！そして今この人(本物ボス)は、もう代わりは大丈夫だと言った…！ということとはまさか…こっちのボスは本物のボスのクローンだということ!？」

偽ボス「俺が…クローン?」

助演出「何その展開ー！あの娘何とかしそー！そしてイメージのボスもノリ良いな」

演出「ヒロインが呼び出したイメージだから、あの娘の言った通りになるのかな？」

助演出「便利」

偽ボス「そんな…それでは俺は…造られた存在だというのか…?」

助演出「うーんまあある意味その通りではあるんだよなあ」

ヒロイ「なんて酷い…！だったらあの本体を倒して…あなたは自由になるのよ！」

本ボス「は？」

偽ボス「そうする！（本物ボスに構える）」

本ボス「いやいやいや！ちよっと待ってちよっと待って！さっきから全然ついていけてないんだけど！皆一回冷静になろうぜ。(殺し屋に絡む) な？」

殺し屋、本物ボスを邪魔そうに押しつけ、その後銃を構える。両手を挙げる本物ボス。

本ボス「……カラス丸くくん！（ライバルに絡む）キミは俺の味方だよね？そういう話だもんね？お前がこいつらを倒せ！やっちまえ！」

助演出「馬鹿！アイドルの子にふるなよ！その子アドリブとかは、」

ライバ「…触るな外道が」

助演出・本ボス「え？」

ライバ「人の命を弄ぶクズが。俺が今まで忠誠を誓っていた主人はこっち（偽ボス）のお方だ。裏でこそ隠れていたあんたじゃあない」

本ボス「な、なんだと？」

助演出「演出…今の台詞」

演出「ああ…勿論あんな台詞は、変更した台本にはない」

助演出「じゃあ、あれはアドリブで」

マネ「…なるほど。今まで私は少し過保護にし過ぎていたのかも、知れませんが。あの子、いや、弟に」

助演出「マネージャーさん…あの子とご姉弟だったんですか！？」

マネ「あ、はい」

助演出「なんかサイズ感とか…全然違いますけどねえ…」

本ボス「ふん…良いだろう。俺だってもっと見せ場が欲しい…お前らまとめてかかって、」

偽ボス、本物ボスにタツクルする。

本ボス「悪質タツクル…！」

その後本物ボス、4人にポコポコにされ、そのままはけさせられる。

ヒロイ「これで…あなたは自由よ」

偽ボス「ありがとう」

ヒロインと偽ボス、豪快な握手を交わす。偽ボス、嬉しそうにはける。

ヒロイ「恐かったわ…！（殺し屋に抱きつく）」

助演出「嘘つけお前」

演出「ふっ…良い、役者だな」

マネ「ええ…昔の私を思い出すわ演出、いえ、慎平ちゃん」

助演出「あのさつきからちよいちよい自分の設定広げるのやめてもらえます？もう終わるんで、この話も」

マネ「でも、今の私は一マネージャー。さて、握手会の準備、してくるわ」

マネージャー、はける。

助演出「…自由な人だな」

殺し屋「悪い思いをさせてすまなかった」

演出「…ラストシーンだ」

殺し屋「でももう大丈夫。これからは、共に生きてゆこう」

ヒロイ「はい」

ライバ「3人で、な」

殺し屋・ヒロイ「いやお前はなんでだよ！」

演出「…良いオチだ」

助演出「そうですか？まあ…急ごしらえだったら、良い方か」

徐々に暗転。舞台後ろ中央にスポット。殺し屋、ヒロイン、ライバル、はける。

助演出「いやでも…なんとか終わりましたね」

演出「ああ。トラブル続きでも、諦めずに食らいついでいけばその逆境が力となり、普段

じゃあ出せない魅力も引き出せる。役者の底力が見られるんだ。たまにはまた…こ

ういう舞台も、やろうじゃないか」

助演出「いや2度とごめんです」

肩をすくめる演出。

完全暗転。

(終)